アジアのスポーツ
テコンドー(跆拳道)

北陸大学東アジア総合研究所所長
北陸大学教育能力開発センター教授
叶　秋男

人類史において世界各地でさまざまなスポーツが発祥し、時代の変遷を遂げながら、現代まで引き継がれてきています。このコーナーでは、東アジアで長い歴史を背景に持ちながら、近代的な装いを遂げ、今日多くの愛好者を引きつけているスポーツを紹介します。今回は朝鮮半島発祥のテコンドーを取上げます。

テコンドーは、漢字では跆拳道と表記しますが、それらの三文字のそれぞれがこの武術の在り様を表現しています。まず「跆」は踏む、跳ぶ、蹴るといった足技を、「拳」は突く、叩く、受けるなどの手技を、そして「道」は道理・道徳に則った生き方を意味します。つまり手足を活用した攻守の技で修練することで自己の力を発揮し、道徳心を高める武術の一つというわけです。

古武術からテコンドーへの歩み

形の上では、中国拳法や日本の空手などとの類似性が高いのですが、テコンドーは、そもそも朝鮮の古武術であったテッキョンと日本の空手が融合してできた近代の武術といえます。というのも、テコンドーの創始者である崔泓熙(チェ・ホンヒ)氏(1918 − 2002年)は、虚弱体質だった少年時代に書道を習うかたわらテッキョンを習い体の鍛錬をし、その後青年時代の日本留学の際に「松涛館空手」を修得しました。その後崔氏がテッキョンと空手を融合する形で新しい武術を考え出すきっかけになったのは、第二次世界大戦後のソウルで韓国国軍創立メンバーの一員となり、軍隊で武術を教えることになったことでした。彼は本格的に武道の研究を始め、自分が修得してきた武術を基に新たな民族独自の武道を作ろうとしたのです。

崔氏の構想は、朝鮮戦争終結の後に完成の運びとなりましたが、氏はその創作に当たって技術と精神の融合を重視しました。彼は「健全なる肉体に健全なる精神が宿る」という考えを実践するものとして武術を位置づけました。そのため、技術体系には現代科学の理論を取り入れ、健康科学の観点からも技能を工夫しました。それと同時に、礼を重視する東洋の倫理道徳に則った精神の修養を盛り込みました。こうして崔氏によって確立された新たな武術は韓国国内で普及していくことになるのですが、1955年、名称制定委員会で正式名称をテコンドーとすることが決まりました※1。

※1：テコンドーに民族独自のものがあるかに関しては賛否両論があり、否定論者は「テコンドー＝空手」論を説いています。

崔氏はテコンドーを世界に広めることに積極的で、1959年に国際テコンドー示範団を結成し、南ヴェトナムや台湾への派遣を皮切りに、テコンドーの国際的な普及を図りました。その普及拡大に基づき、1966年にはソウルで国際テコンドー連盟(ITF)が設立されました。因みに、わが国へのテコンドー普及は比較的遅れ、80年代になって道場が作られ始め、日本国際テコンドー協会が設立されたのは1984年のことでした。いずれにせよ、こうしてテコンドーも、日本の柔道や空手のように国際的認知を受ける存在になったのでしたが、韓国で編み出されたこの新武術は、その後国内政治との絡みで複雑な歩みを強いられてきました。

1973年、独裁色を強めた朴正熙政権に反発した崔氏はカナダへの政治亡命を余儀なくされ、ITFの本拠地もトロントに移されることになりました。このため、韓国ではテコンドー存続のため、新たに世界テコンドー連盟(WTF)が設立され、以後二つの組織が内外で勢力を争う事態が続いています。崔氏が去った後の韓国テコンドー界では、テコンドーは「新羅時代からあったわが国固有の武道」と位置づけられました。

二つの組織の確執は、ソウル・オリンピック開催にあたってテコンドーが公開競技種目になるとさらに厳しさを増しました※2。結局のところ、ソウルでの第24回オリンピックはWTFテコンドーが公開競技種目と認定され、以後のオリンピックでもこの判断が継続しています。したがって、テコンドーは、ソウル(1988年)、バルセロナ(1992年)のオリンピックでの公開競技を経て、2000年シドニー・オリンピックより正式種目となりましたが、基本的にはWTFテコンドーで競技されています。こうした経緯の背景には、ITFのテコンドーが実践的格闘技の色合いを維持し、他方のWTFのテコンドーが競技スポーツとして洗練されてきた違いによるところもあるといえましょう。

2002年、ITFの身内絡みの内紛が続く中で崔氏は逝去しましたが、ITFではその後もITFの商標を巡る諍いが続きました。他方、WTFの方も、2004年、IOC副委員長でありWTF総裁でもあった金雲龍が汚職容疑で拘束起訴され、総裁が交代する事態となりました。新しい総裁には慶熙大学総長の趙正源(チョ・ジョンウォン)氏が選出され、現在に至っています。

こうした政治に絡んだ二組織の確執はあるものの、2000年シドニー・オリンピックで岡本依子選手(ITF系)が銅メダルを獲得したことで、日本人には馴染みのなかったテコンドーが話題に上るようになりました。

テコンドーの特徴

そもそもテコンドーには24種の攻守技法があり、そうした型を稽古することで柔軟な動き、筋力アップ、正しい呼吸法を身に付け、さらに体の重心を巧みに操って格闘技能を高める狙いがあります。この武術は、ネリョチャギ(カカト落とし)やティットラチャギ(後ろ廻し蹴り)といった足技に代表される技術的特徴を持っています。このため「足のボクシング」と呼ばれることさえあります。テコンドー示範団による演技では、跳躍して前蹴り、回し蹴り、横蹴りを連結する蹴りの連続技や、前蹴りと後ろ蹴りを同時に行なうはさみ蹴りといった難易度の高い技が披露されますが、テコンドーの真骨頂といえる技です。

スポーツとしてのテコンドーでは、防具(頭部、胴部、腕部、脛部、それに手と足用)を装着し、上

※2：崔氏は1980年に北朝鮮でのテコンドー普及にも乗り出した。このため、北はITF、南はWTFという構図が出来上がり、岡本選手の参加問題が紛糾したように、南北のオリンピック共同参加に陰を落としています。また、北朝鮮では、「高句麗」時代から引き継がれてきたテコンドーが、解放後金日成・正日親子によって普及したと宣伝されているようです。

半身への有効技を競う試合が行なわれます。通常試合時間は2分で、1分間のインターバルを挟んで、3ラウンドを行ない、有効技は、胴部では1点、頭部では2点とカウントされます。もし正規時間内で決着が付かない場合は、延長して有効技を最初に出したほうが勝ちと決めるサドンデス方式をとっています。

近代武術としてのテコンドーにはまた、実践的な攻守技法ばかりでなく、音楽と組み合わされた体操もあり、楽しみながら有酸素系運動を行なう工夫が盛り込まれています。

韓国では、テコンドーをスポーツ科学的に研究し、高い水準の技能修得を目指す高等教育機関も存在します。その代表がソウルに本部校のある慶熙(キョンヒ)大学校です。そこで次にこの慶熙大学校にある体育大学テコンドー学科を紹介することにしましょう。

慶熙大学校体育大学テコンドー学科

慶熙大学は、1949年に設立された韓国屈指の私立総合大学であり、ソウルキャンパス、水原キャンパス、及び平和福祉大学院のある光陵キャンパスからなり、学生数約29,000名、教員数2,400名を有しています。この大学の体育学部には、テコンドーの発展の可能性をさまざまな角度で研究し、高い技術修得を目指す専門学科が設けられており、全国から優秀な学生が集まり、日々テコンドーの修練に励んでいます。

この学科に入学するには、全国大会1位獲得、2段以上、高校推薦、試験など、いずれかの方法で合格する必要があります。入学者のほとんどが長い修行歴を持っているようです。

大学では、技能だけでなく、スポーツ科学、競技ルール、歴史なども学びます。さらにより高度な研究を目指す学生のために大学院も設置されています。こうした整った研究環境のため、世界のさまざまな国からも学生が集まってきています。

テコンドー学科の優秀な学生によってテコンドー示範団が組織され、テコンドーの広報使節として世界各地を訪れ素晴しい演技を披露しています。因みに、1998年には最初の日本公演を行っており、2004年アテネ・オリンピックでも卓越した演技を披露し、観衆を魅了しました。

慶熙大学校体育大学テコンドー示範団はまた、平成5年に北陸大学と慶熙大学の間で姉妹校提携が行なわれたことをきっかけに、2004年から毎年本学学園祭の際に来沢し、その卓越した演技を披露してくれています。

北陸大学で模範演技を披露する慶熙大学テコンドー示範団

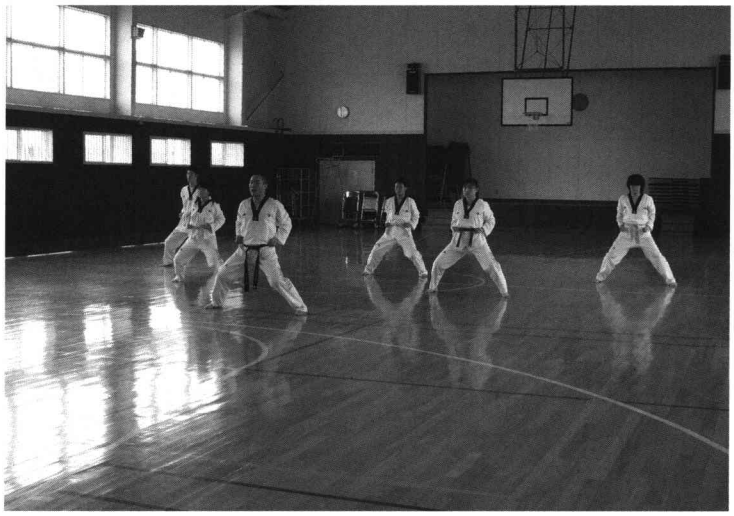
北陸大学のテコンドー部

北陸大学のテコンドー部は2005年に結成されましたが、その際は部員指導のために慶熙大学校から指導者としてソウル出身の黄益洙氏を招聘しました。5歳からテコンドーを始めたという同氏は当時24歳という若さでしたが、すでに四段の実力があり、大学在学中から軍隊の教練で指導教官を務めるほどの才能の持ちでした。

黄益洙氏は、北陸大学では未来創造学部に所属し、学生として日本語の習得に励むかたわら、月曜日から金曜日までの午後5時から2時間ほどみっちり部員にテコンドーを仕込み、北陸大学テコンドー部の本格的な基礎作りに貢献されました。

現在は、二代目コーチとして金洛顕氏を迎えています。金氏も7歳からテコンドーを始め、高校3年生のとき全国優勝した経歴を持ち、その温和な風貌からは想像しにくい実力の持ち主です。本人はテコンドーを始めるきっかけはダイエットのためだったと語りながらも、将来はテコンドー普及のために海外でコーチ職に就く夢を抱いています。

こうしたコーチの下で、北陸大学テコンドー部は活動しているのですが、現在は蘇州出身の胡さんが部長を務め、和気藹々とした雰囲気の中で勉学の合間を縫って日夜厳しい修練に励んでいます。何故こんな言い方をするかというと、多くの部員が薬学部生で、日々大変な学習量をこなしながらの練習になっているからです。それでも部員たちは、規則的な運動によって体が鍛えられるとともに、昇段する悦びを糧として、嬉々として部活に励んでいるのです。小柄で元来柔和な顔たちの薬学部1年生の村上君は、「テコンドーを通じて自分の限界を確かめたい」と、時に一年間の修練がもたらした精悍な面構えをみせながら笑顔で語ってくれました。



北海道岩内町合宿での練習風景